

## 9 当科における総胆管結石に対する内視鏡的十二指腸乳頭切開術の検討

古川 浩一・滝澤 一休・池田 晴夫  
岩本 靖彦・渡辺 和彦・相場 恒男  
米山 靖・和栗 暢生・五十嵐健太郎  
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

総胆管結石に対する内視鏡的十二指腸乳頭切開術(以下EST)は標準治療として国内外に広く認知されている。今回、われわれは当科で2000年6月から2005年5月まで実施した134例について検討し、治療の現状について概観するとともに、その長期予後について考察した。対象の多くが感染や黄疸を併発しており、EST前に何らかのドレナージが施行されていた。そのため、感染や黄疸などのコントロール期間を要しESTまでの入院期間は平均10.4日間であった。しかし、EST後の入院期間は手術待機のために入院継続した例を除くと平均4.7日であり、ほとんどの症例で一期的に結石を除去し、短期間の経過にて治療が終了していた。また、観察期間中の総胆管結石再発例は3例、胆管炎再燃症例は2例であった。EST単独でも総胆管結石治療として十分な長期予後も得られていると考えられた。また、医療経済の観点から今回の入院期間をふまえて治療費概算を算出し検討したのであわせて供覧する。

## 10 胆管空腸吻合術後晩期胆管炎の病態と治療成績

青野 高志・加納 恒久・亀山 仁史  
松木 淳・長谷川 潤・岡田 貴幸  
武藤 一朗・長谷川正樹

県立中央病院外科

胆管空腸吻合術を施行した96例を対象に術後晩期胆管炎を検証した。原疾患は悪性83例、良性13例で、急性胆道炎の診療ガイドライン(案)に従い、胆管炎の診断、重症度判定を行った。胆管炎が28例に発症し、延べ58回の入院治療を要した。全例、悪性疾患の術後で、その68%には癌再発が認められた。重症度は重症16例、中等症25

例、軽症17例であり、全例に抗菌薬治療を行い、更に胆管閉塞が認められた5例に経皮経肝的胆管ドレナージ(PTBD)を行い、うち1例に再手術を行った。また、輸入脚閉塞が認められた3例に空腸ドレナージを行った。軽症例や癌再発のない例は全例改善し退院した。一方、中等症例の92%、重症例の81%で胆管炎は改善したが、中等症例の24%、重症例の44%は原疾患により死亡退院した。胆管空腸吻合術後晩期胆管炎は悪性疾患の術後に特徴的であり、抗菌薬治療に加えPTBDや空腸ドレナージを行うことで、多くの胆管炎は制御出来た。軽症例や癌無再発例の予後は良好であったが、癌再発に関連し発症した中等症・重症例の予後は不良であった。

## 11 先天性胆道拡張症術後35年後に発症した胆管細胞癌の1例

高野 可赴・黒崎 功・嶋村 和彦  
小海 秀央・北見 知恵・横山 直行  
佐藤 好信・畠山 勝義・中平 啓子\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野  
亀田第一病院外科\*

【はじめに】先天性胆道拡張症において胆道癌の合併はよく知られているが、分流手術後に認められた胆道癌の報告は稀である。先天性胆道拡張症に対して分流手術後35年を経過して発症した胆管細胞癌の1例を経験したので報告する。

症例は44才、男性。

既往歴：1964年(4才)先天性胆道拡張症にて胆嚢十二指腸吻合術

1968年(8才)総胆管結石症にて胆嚢摘出術、総胆管十二指腸吻合術

1970年(10才)総胆管結石症にて総胆管切除術、総肝管空腸吻合術(Roux-en Y)

現病歴：2004年7月頃、心窩部不快感出現。10月26日近医受診し、肝機能障害指摘。精査にて肝左葉に腫瘤認められ、11月2日当科外来紹介受診。胆管細胞癌疑われ、11月29日当科入院。

検査所見：CEA 29.3ng/ml, CA19-9 1662U/L.

肝左三区域切除，胆道再建，門脈・肝動脈再建を施行した。門脈再建には左腎静脈グラフト，動脈再建には胃十二指腸動脈を用いた。現在 Gemcitabine による化学療法を施行し，腫瘍マーカーは正常化している。術後8ヶ月の現在，腫瘍マーカーは正常化し，画像学的にも明らかな再発は認めていない。

【まとめ】肝外拡張胆管の可及的切除，胆道再建による分流手術を行っても，本例のような肝内胆管の発癌リスクは除去できず，肝切除を含む分流手術が必要と思われる。先天性胆道拡張症に対する分流手術後は，胆道癌の発症を念頭に置き長期間の経過観察が必要と考えられた。

## 12 腹痛，嘔吐で発症した膵頭部 Solid and Cystic Tumor (Frantz 腫瘍) の小児例

内山 昌則・大滝 雅博・長谷川正樹\*  
 武藤 一朗\*・青野 高志\*・岡田 貴幸\*  
 長谷川 潤\*・関谷 政雄\*\*・酒井 剛\*\*  
 県立中央病院小児外科  
 同 外科\*  
 同 病理\*\*

本腫瘍は稀な疾患ではあるが10-20代の若年女性に好発し，治療は腫瘍完全切除が原則である。本症で腫瘍切除術を行ない術後3年再発なく良好なので報告する。

症例は12歳女児，腹痛，食欲不振，嘔吐で発症した。腹部腫瘤を触知しCTで膵頭部腫瘍と診断され，鎮痛剤の静注を必要とするなど症状が急激で小児外科治療が必要で当科に紹介された。血中NSEが40.3と高値を示した。CTでは膵頭部に6-7cmの腫瘍があり被膜で覆われ，内部は充実性で一部嚢胞状であった。MRCPでは胆管と主膵管は腫瘍により圧排されていたが拡張はなく，ERCPで主膵管の圧排所見があった。本症と診断し膵管，総胆管は温存し膵頭部腫瘍切除術を施行した。腫瘍は索状物で区分けされ多胞性で出血巢もみられた。病理では小型で均一な腫瘍細胞が充実性-嚢胞状-偽乳頭状の増殖を示していた。術後経過は順調でアミラーゼの上昇もなくNSEも正

常化し術後3週間退院となった。

## 13 偶然に発見された，Solid Pseudopapillary Tumor の1例

藤田 亘浩・小出 則彦・井上雄一郎  
 本間 憲治

厚生連上越総合病院外科

【はじめに】Solid Pseudopapillary Tumor (以下SPT)は若年女性に好発する稀な腫瘍である。今回我々は偶然に発見された腹部巨大石灰化像の精査にて上記と診断し，切除し得た症例を経験したので報告する。

【症例】症例は33才女性。近医にて腰痛の精査で，腹腔内巨大石灰化腫瘍を指摘され，平成16年6月25日精査加療目的に当科紹介初診した。7月1日CTにてSPTと診断され，精査の後9月16日膵腫瘍摘出術を施行した。術後経過は良好で，19病日退院した。外来経過観察中，CT等にて腫瘍の再発等は見られず，順調に経過中である。

【考察】膵嚢胞性腫瘍は，病理学的に細かく分類され，悪性度や予後，治療方針が異なる。SPTは本症例のように偶然発見例や無症状例が多く，巨大腫瘍として指摘されることが多い。本疾患は約14%悪性化し，同時性，異時性に肝転移などを来たすものもあるが，リンパ節転移は極めて稀で，腫瘍の完全切除が得られれば95%の根治が得られる。

【まとめ】稀なSPTを経験し，切除しえた症例を提示した。今後も外来経過観察していきたい。

## 14 経皮経肝門脈血採血検査が部位診断に有用であったインスリノーマの1例

横山 恒・佐藤 秀一・摺木 陽久  
 津田 晶子・阿部 要一\*・山田 明\*  
 小林 央\*\*  
 新潟医療生活協同組合木戸病院内科  
 同 外科\*  
 同 神経内科\*\*

症例は64歳男性。急に歩けなくなり転倒した